

吉田南さん(ヴァイオリン)

フレッシュ名曲コンサート

響きの森 クラシック・シリーズ Vol. 65

2018年9月8日(土) 15:00
文京シビックホール 大ホール

吉田さんの演奏はとても自然で、無理がないと思う。その分聴き手の耳にも心地良く届く。また表現が豊かで、ベートーヴェンの変化のある様々な旋律を聴きながら、自然と明るい気持ちになったり、悲しくなったり、力をもらったり。その曲想が素直に伝わって来る。

弱冠20歳の吉田さんが、どうして聴衆の心に響く演奏ができるのか。格好よく整えられていても中身の無い演奏や、冷たい人の音楽を聴きたくない、という吉田さん。やはり音楽は演奏家の個性、人柄が映し出されると、改めて感じた演奏会だった。



◆プログラム

出演 ヴァイオリン: 吉田南

指揮: 小林研一郎

管弦楽: 東京フィルハーモニー交響楽団

◆プログラム

ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲

交響曲第7番

◆アンコール曲

イザイ作曲

無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番より
第3楽章「アマービレ」

今年から米国ボストンのニューイングランド音楽院に留学されている吉田さん。留学生活はどうか、とお聞きしたら「きついです。」との答え。でも様々な経験は間違いなく演奏を豊かにするはず。ボストンでどんな日々を送り、何を感じているのかお聞きしました。

Q1. 今日にはベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏してくださいましたが、この曲をどのように演奏したいと思って臨まれましたか。何を伝えたいと思って演奏されましたか。

A1. この曲は、いつかは対峙しないとけないと解っていましたが、今の私に弾く事ができるのか、弾く資格があるのか。と、お話をいただいた時にかなり悩みました。私の中では、ベートーヴェンのコンチェルトは、コンチェルト界の王様のようなイメージです。

けれども20歳になり、ヴァイオリンを開始して15年という節目の時期であったし、やるなら今しかないと思い至り、お引き受けしました。今までたくさんの人に支えられ、導いていただいたことを感謝しながら、指揮者の先生、オーケストラの皆さんと、手を取り合っって協力し、シンフォニックに奏でられたらいいなと思っていました。



K.Miura (写真提供: 文京シビックホール)



K.Miura (写真提供: 文京シビックホール)



© K.Miura (写真提供: 文京シビックホール)

Q2. 今日の演奏を経て、何か新しい発見はありましたか。今日の演奏から得たものはありましたか。

A2. この曲には、超絶技巧や派手でソリスティックな要素はありません。そこが最も難しいところです。穏やかで気高く、温かいオーラをお客様に伝えるためにはどうすれば良いかを、すごく考えました。

ある時、ヴァイオリンは歌う楽器だったんだと気付いて、優しい気持ちで、伸びやかに歌えば良いんだと思い、そこからは心が楽になりました。難しいテクニックや派手なパフォーマンスだけが、聴き手を惹き付けるわけではないということ、身をもって理解できました。



K.Miura (写真提供: 文京シビックホール)

Q3. 今年から米国ボストンのニューイングランド音楽院 (New England Conservatory of Music) に留学され、ミリアム・フリード先生に師事されていますが、以前からどうしても師事されたいと思っていらっしゃったミリアム・フリード先生はどんな先生なんでしょうか。先生のどういうところを学びたいと思われたのでしょうか。先生からはどんなアドバイスをもらっていますか？

A3. ミリアム先生は音楽に非常に厳しく、人に対しては愛情溢れる方です。演奏はスケールがとても大きく情熱的で、いつも研究熱心です。それに何事にもストレートで、態度や口に出したことに裏表がありません。

「芸術は人の心と直結しているものだから…」とよく書家の母が言っていました。格好よく整えられていても中身の無い演奏や、冷たい人の音楽を私は聴きたくありません。そういう意味で、ミリアム先生は、人間としても音楽に対しても、私の道標になってくださる方だと思い、弟子入りしました。

先生からのアドバイスは常に、「考えろ！」です(笑)。私の考えたことは、たとえ的外れであつても、最後まできちんと聞いてくださいます。とにかく、なぜそう弾くかを説明できる演奏を求められています。



マエストロと(ご本人より)

Q4. これまでの米国での留學生活で、吉田さんは何を心得、ご自分の音楽がどのように変わったと思われますか。

A4. ちょっとだけ忍耐強くなりました。嫌なことや理不尽に思えることも、一旦こらえることができるようになってきました(涙はちょびっと出ますが…)。

音楽も、気持ちが先走ることなく、グッとこらえられるようになってきたというか…演奏に対して想定外の事が起こっても、頭に血が昇って見境がなくなるような場面が少なくなりました。



Q5. 歴史や文化、風土の違いが音楽にも表れると思いますが、米国、ヨーロッパ、日本の音楽の間にどんな違いがあると思われますか？

A5. 日本ではクラシック音楽は、少し堅苦しい、難しいといったイメージがあるかもしれませんが、欧米では普段の楽しみのひとつです。『ボストンシンフォニーオーケストラ(BSO)』が、春夏になると『ボストンポップスオーケストラ(POPS)』に変わります。巨大な看板までBSOからPOPSに取り替えられてしまいます。

映画音楽やディズニー音楽などが奏でられ、町中がウキウキしたり、Uberの運転手さんがラジオから流れるオペラと一緒に歌ってくれたり、生活に溶け込んでいるなあと感じます。

Q6. ご自分の演奏の個性は何だとお考えですか。他のヴァイオリニストと差別化するとすると、どんな点にあるとお考えですか。

A6. 私はあんまり器用ではありませんし、ボーツとしてるので、同世代の意識の高い人達から見たら物足りない感じがするとよく言われます。

でも音楽は競争ではないし、「私は私」とマイペースでいこうと考えています。そんな中で、いつも音色にはこだわっているつもりです。作品から立ち昇る色彩を音に乗せて奏でられたらいいなあと思い、常に意識しています。



原田幸一郎先生ご夫妻と(ご本人より)

Q7. 吉田さんが一番幸せだなあと思う時はどんな時ですか。自分を一番元気づけてくれるモノ(人、食べ物等)は何ですか。

A7. 陽気で明るい両親が心の支えで、1日が終わったとき家族でライン電話するのが楽しみです。あとは、ぴかぴかの白いご飯！父の故郷である新潟県の素晴らしい新作米『新之助』をボストンに送ってもらい、毎日炊飯して食べてます。これが元気の元です。



Jordan Hall (ニューイングランド音楽院ホームページより)



ニューイングランド音楽院(Wikipediaより)

吉田さんの演奏は聴き手の耳に優しく、心地良かった。「音楽は競争ではない。」という吉田さん。「優しい気持ちで、伸びやかに歌えばいいんだ。」と気づいたという。そういう吉田さんの演奏だから、聴き手の心も安らぎ、ゆったりとした気持ちで聴けるのかもしれない。日々の忙しい生活、競争社会で擦り切れそうな心を休めてくれる。これこそ音楽の持つ力なのだろう。音楽家にとって大切なのは、技術的なことより、どれだけ聴き手の心に届き、心を動かすか、なのかもしれない。

ボストンでの生活で忍耐強くなったという吉田さん。音楽家としても人間としても道標というミリアム先生に常に「考えろ！」とアドバイスされるという。そんな留学生活を経て、どんな音楽家になっていくのだろう。その変化を追っかけるのが本当に楽しんだ。